

日本語の副詞研究の展望

奥田 智樹

0. はじめに

副詞：それ自身語形変化(活用)をせず、もっぱら用言またはそれ相当の語句を修飾(限定・強調)することを基本的な機能とする語 (工藤 2000, p.164)

通常は、「わざわざ・ゆっくり(と)・すぐ(に)」などの情態副詞、「やや・もっと・非常に・すごく」などの程度副詞、「けっして・おそらく(は)・もし(も)」などの陳述副詞、の三つに下位分類されている。

自用語、自用言：体言、用言

活用や格変化を持ち、主語や述語のほか、補(足)語、連用修飾語、連体修飾語などの「文の成分」になり、種々の構文的な機能を持つ語

副用語、副用言：副詞、連体詞、接続詞、感動詞

活用や格変化を持たず、文の骨組みをなす主語や述語になりえず、副次的依存的な一つの機能にほぼ固定している語

副詞という品詞の浮動性

	『大辞泉』 1995	『広辞苑』 第五版 1998	『日本国語大辞典』 第二版 2000	『新明解国語辞典』 第六版 2005
偶然	名・形動/副	名/副	名/名(副詞的に用いて)	名(副詞的にも用いられる)
存外	名・形動(副詞的にも用いる)	名	名	副/形動
折柄	名(副詞的・接続助詞的にも用いる)	名	名/副	副/副(接続助詞的に)
多少	名/副	名/副	名/名 副詞的にも用いる	名/副
結構	名/形動/副	名/副	名/形動/副	名/副

1. 情態副詞：動作や変化のしかた(様態)、あるいは出来事の付随的なありかた(状態)を表わして、主として動詞を修飾する副詞

語構成上、語尾「と」「に」を持つものが多く、着脱可能なものもある。

おのずと分かる ゆっくり(と)歩く

ついに完成した すぐ(に)行く

「と」語尾系の情態副詞として、「擬声擬態語」を多くもっている。

ーリ： バタリと ころりと だらりと

ーン： バタンと ころんと だらんと

ーッ： バタッと ころっと だらっと

反復： バタバタ(と) ころころ(と) だらだら(と)

さまざまな要素の「疊語(反復形)」が多い。

名詞： 道々 いろいろ(と) 口々に

動詞： いきいきと 思い思いに しみじみ(と)

おそろおそろ かえすがえす つくづく(と)

形容詞： ちかぢか 青々と ひさびさに

漢語： 重々 堂々と 内々(に)

動作などのあり方を表わし動詞を修飾するという機能は、この副詞のほか、形容詞・形容動詞の連用形によっても果たされる。情態副詞の命名者山田孝雄は、形容動詞の語幹「静か・堂々」などをも情態副詞と扱ったが、その後吉沢義則、橋本進吉らによって、文語でナリ・タリ、口語でダの語尾をとって活用する「静かなり・堂々たり／静かだ」などは形容動詞という品詞として立てうると提唱され、学校文法等での通説となっている。(文語のタリ活用は口語ではすたれたため、口語では「堂々と」を副詞、「堂々たる」を連体詞として扱うことが多い。二活用形に限られた不完全形容動詞とする説もある。)

このように、現在のいわゆる情態副詞は、形容動詞の連用形と意味・機能に一定の共通性をもちながらも、活用しえない点で、いわば取り残された語群である。擬声擬態語や疊語という特殊な語構成をした語が多いこと、また語尾に「と」「に」をとるものが多いことは、こうした事情による。この両者の間のどこで線を引くか、その意義の連続性と非連続性の境界が常に問題となっている。

意味

外的・内的な動作の様態(やり方)や量的な状態(あり方)を表わすもの (多数)

ゆっくり・びったり・そろそろ・しずしず

のんびり・さっさと・てきぱき・ぺちやくちや・堂々と

たくさん・たんまりと・どっさり／おおぜい／すべて・ほとんど・ほぼ

時に関するもの

かつて・あらかじめ／しばらく／しばしば・たまに

まだ・もう／ようやく・とうとう

突然・不意に／たちまち・すぐ

意志や態度に関するもの

わざと・あえて・ことさら(に)／つい・思わず・うっかり

行為者間の関係のあり方に関するもの

一緒に・互いに／みずから・直接・かわりに／おのおの・めいめい・それぞれ

「不特定性」を表すもの

なんとなく・どことはなしに／なんか・どこか・いつか

2. 程度副詞：状態性の意味をもつ語にかかって、その程度を限定する副詞

結びつく相手すなわち状態性の意味をもつ語は、いろいろな品詞にまたがる。

- ① 基本的な用法として比較的自由に形容詞・形容動詞と結びつく。：「とてもうれしい」、「わりあい親切な人」、「大変幸福だ」、「かなりよくなった」、「もっと静かに話せ」
名詞の中でも性質や状態を表す意味を持つものや、名詞の「性質的」な面が強調されると程度副詞と結びつくことがある。：「かなりやり手だ」、「ずいぶん子供だ」、「相当動脈硬化だ」
- ② 他の副詞(情態副詞)や連体詞の一部の語と結びつく：「ずいぶんはっきり断ったね」、「とても大きな家」
程度副詞と情態副詞との結びつきは最近特に制限が緩くなってきている。
- ③ 状態性の動詞(句)と結びつく：「たいへん疲れた」「非常に興味がある」
程度副詞の「程度」は「量」の概念を同時に内包する場合が多い：「死傷者がかなり出た」、「薬を少しのんだ」、「野菜をもっと摂りなさい」 量の副詞の場合、動作は状態性のものでなくても共存できる。
- ④ 相対的な広がりを持つ時間・空間を表す名詞(及び代名詞)と結びつく：「だいぶ昔」、「ずっと前(時間的に)」、「ずっと前(距離的に)」、「もっとこっち」
同様の用法に数量を表す名詞と直接結びつく用法がある：「ただ一人」、「もう二つ」、「ほぼ一億」、「ちょうど三時」

「だけ」「ほど」「くらい」等の副助詞は、「好きなだけとりなさい」「おそろしいほど美しい」「腰が抜けるくらい驚いた」のように程度の副詞句を構成する。これらを形式副詞として扱う考え方もある(森重敏・内田賢徳／奥津敬一郎など)。

以上の情態副詞と程度副詞は、被修飾語たる用言の属性的な意味(語彙的な意味)の面を修飾するものであり、その用言がどのような用法に立っても、つまりどんな陳述(述べ方)的な意味で用いられても、用いられる。たとえば、

ゆっくり歩く 一歩け 一歩けば 一歩かない

もっと大きい　　－大きくなれ　　－大きければ　　－大きくないと

などのように、断定か命令か仮定かなどの違いにかかわりなしに用いられる。この点、次に述べる陳述副詞とちょうど逆であり、情態・程度副詞をあわせて、陳述副詞に対し、属性副詞と呼ぶことがある(山田孝雄)。

3. 陳述副詞：(叙述副詞・呼応副詞とも呼ばれる) 否定・推量・仮定など、述語の陳述的な意味を、補足したり明確化したりする副詞

これらの語はたとえば「けっして行かない」「たぶん行くだろう」「もし行ったら」のように、一定の陳述的な意味をになう形式と呼応して用いられる。

代表的なものとしては次のような種類の述語と呼応する語が挙げられる(『国語学大辞典』)。

〈否定〉 けっして・必ずしも／たいして・ちつとも・ろくに・めったに

〈断定～推量〉 きつと・おそらく・多分／さぞ

〈否定推量〉 まさか・よもや

〈依頼～願望〉 どうぞ・どうか・ぜひ

〈条件〉 もし・まんいち・仮に／たとえ／いかに・いくら／せつかく

〈疑問〉 なぜ・どうして／はたして・いったい

〈比況〉 あたかも・さも・まるで

典型的な陳述副詞は、情態・程度の属性副詞とは逆に、もっぱら述語の陳述的な側面にかかわって、属性的な意味の側面には関係しない。その現われとして、

① たとえば「おそらくこの事件の解明はこれ以上進展しないだろう。」という文から、陳述副詞「おそらく」を取り除いても、文のコトガラの内容には変化がないこと。

② 「けっして行かない」「けっして大きくない」など用言述語だけでなく、「けっして犯人ではない」など体言述語にも自由にかかりうること

という二つの副次的な特徴を指摘することができる。

ただし、一般に陳述副詞の代表的な例としてあげられるものの中にも、「たいして・ろくに・さぞ」など、否定や推量と呼応する性格をもつとともに、程度や情態の属性的な意味とも関係する性格をあわせもつものがあり、これらは上の二つの特徴はあてはまらない。

これは たいして おもしろくない ≠ これはおもしろくない

さぞ つらかったでしょうね ≠ つらかったでしょうね

*彼は たいして 犯人ではない。

*彼は さぞ 犯人だろう。

陳述副詞のとらえ方としては、構文的に典型的であるものをより狭く捉えて属性的な意味

に関わる語群を排除していくか、あるいは意味的に発話全体を予測させるものとして(一言「さぞ」、「たいして」と述べることで、続く発話の予告がなされる)広く接続詞的副詞まで含めて捉えていくか、様々な試みがなされている。注目される研究としては、渡辺実の「誘導副詞」の概念、中右実の文副詞のタイプなどをはじめとする研究が知られている。

以上の三分類のほか、「こう」「そう」「ああ」「どう」の四語を指示副詞と呼ぶことがある。普通、「どう」は陳述副詞、その他は情態副詞に分類されるが、「こう暑くては食欲減退だ」のように程度副詞的な用法があったりして性格が特殊であるという理由で別にするべきだという考え方もある。

4. 副詞への転成

他品詞の副詞的用法

名詞の「副詞用法」(「時」と「数量」を表わす名詞)

きょう行きます。 りんごを三つ買う。 友人が多数出席した。

きょうが約束の日だ。 来年のきょうもここで会おう。

一つをむいて食べた。 残りの二つは、ジュースにした。

形容詞・形容動詞の「連用形副詞法」

美しく咲く。 きれいにかたづける。 cf. きれいに忘れる。

花が美しい。 きれいな部屋。 cf. *きれいな忘却

副詞としての認知

副詞には、体言や用言の特定の語形(いわゆる文節の形)から移行してきたものが多い。それらは大別して次のようなタイプに分けられる(『国語学大辞典』などによる)。

① 連用修飾の形が、独自に意味又は機能に変化をきたしたもの。

例：こんな本ならいっぱいある よく欠勤する いやに機嫌がいい ばかに元気だ
打開は極めて困難だ

② それ自体は大した変化をしていないが、他の活用形が失われたため孤立して副詞に分類されたもの。

例：常に、まさしく、堂々と

③ 連語や句形式のものが一語化して副詞に移行してきたもの。

例：思う存分語り合おう ことによると厄介なことになるかもしれない

意味機能の変化にせよ、活用形の喪失にせよ、一語化にせよ、その副詞への移行の度合いには連続的に様々な段階があり、境界に一線を引くことはむづかしい。副詞と認定するか否かは学者により異同が大きい。

問題になるものも含めて主なパターンを示せば、次のようになる。

- i) 体言から。 一番、実際、など
体言+助詞： 今に、力まかせに、はだして、花と(散る)、心から、頭から(否定する)
- ii) 動詞から。
連用形： さしあたり、くり返し
テ形： 決して、至って、強いて、初めて、とんで(帰る)
仮定形： たとえば、いわば
否定形+ず： 思わず、残らず
- iii) 形容詞から
連用形： よく、あやうく、すごく、まさしく
カリ活用否定形+ず： 少なからず、あしからず、遠からず
- iv) 形容動詞から。
連用形： 常に、非常に、やけに、ばかに
語幹： 確か、けっこう、大変
- v) 連語・句から。
案の定、念のため、どっちみち、まもなく、何もかも、何となく
- vi) 形式副詞など副詞化の接辞と共に用いられる語。
事実上、予想どおり、我ながら、骨ごと

5. 副次的用法

副詞は、はじめに述べたように、単独で連用修飾語に立つのが基本であるが、中には、次のような副次的用法をあわせもつものもある(『国語学大辞典』等による)。

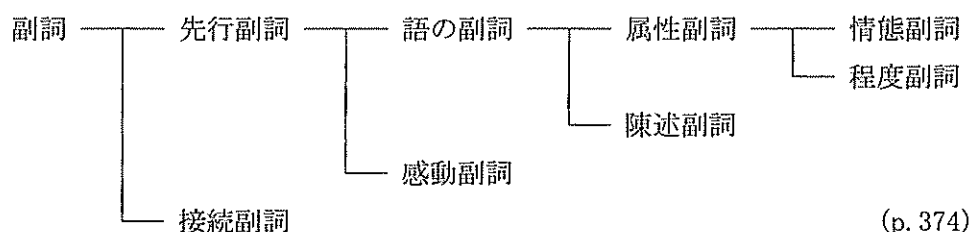
- ① 格助詞「の」を伴い連体修飾語となるもの
例：まさかの時、もしもの場合、かなりの腕前、一層の寂しさ、ぴったりの服、たくさんの人
- ② 「だ・です」を伴い述語となるもの
例：まだだ、もうちよつとです、まだなかなかです、最近稼ぎがさっぱりだ、この役は私にぴったりだわ

6. 副詞論研究の系譜

6.1. 山田 (1936)

山田は、副詞をその機能と性質により、次のように分類している。そして、これが現在の日本語副詞論の基礎となり、副詞を陳述副詞、程度副詞、情態副詞に分けることの根拠と

なった。



山田は、「ここに副詞といへるは副用語たる品詞の義にして」(p. 368)と述べる様に、直接に文の骨子たる主語述語になりえず「必ず他の自用語即ち体言又は用言の先住を条件とし、それに依りて存立するものにして」文の構成に関しては、副次的依存的な職能に固定されるという副用語の性質をもつ品詞として副詞を規定した。それゆえ、山田の分類においては、現在接続詞あるいは感動詞と呼ばれるものも、接続副詞、感動副詞として副詞に含まれている。

山田は、まずその語の意味が下に続く語句のみに関するものと、それより前に現れた語句の意味を下の語句に連ねて意義上二者を媒介結合するものとに二分し、前者を先行の副詞、後者を接続の副詞と呼んだ。先行の副詞は、ある文句に先行するものと、ある語に先行するものに区分された。ある文句に先行するとは、例えば「いな、これは余が所有なり／うべ、かくや姫のこのもしがりたまふにこそありけれ／あはれ、おもしろき月夜かな」(p.369, 下線は奥田)のように次に来る文句の全体の意義を導くもので、応答諾否の語と感動を表す語との二種が含まれ、これをまとめて感動副詞とした。次に、語に先行する副詞は大別して、属性の装定をするものと陳述の装定をするものの二種があると考えた。山田はこの分類の根拠を「用言に属性と陳述の力との二要素の存する事実と並行する」ことに求めている。そして属性を装定する副詞に「それ自身がある属性概念を具体的に有し」「自ら属性を表し、かねて属性の修飾をなしうるもの」と、「意義として単に程度を表すもので専ら他の属性を表す副詞又は用言に属してその属性の程度を示すに用いられるもの」との二つのタイプを認め、前者を情態副詞、後者を程度副詞とした。これが元となって副詞を「情態」「程度」「陳述」の三分類の枠組でとらえる考え方が一般的となった。

[情態副詞について]

- ・ 情態の副詞は意義上よりいへば、それ自身に具体的の観念ありて事物の属性をあらはすものにして、その観念のみをいはず形容詞に似たるものなり。〔中略〕情態の副詞はかく意義に於いて形容詞に似てありながら、なほ副詞なりと称せらるゝは陳述の能力の欠けたるによる。而してこれらは属性観念を属性本来の性質のまゝ依存的のものとしてあらはすが故になほ体言たること能はずして依存的に他の観念語を装定するにのみ用ゐ

らるゝなり。(p.378)

- ・ 情態の副詞はそのまゝにて用ゐられ、或は助詞「に」「と」を伴ひて用言の属性を装定するを主たる職能とし、又稀には助詞「の」を伴ひて名詞の装定をなす。(pp.378-379)

[程度副詞について]

- ・ 程度の副詞は情態性の属性の程度を示すものにして情態の意を有する用言及び情態副詞の上において、その属性を限定する性を有す。[中略] 而して、これらは専ら状態をあらはす語に付属して之を限定するものにして、動作には関係なしと見ゆ。(pp.386-387)
- ・ 他の副詞を限定しうるものは程度の副詞に限られたる現象にして、情態の副詞には存せぬ特性なり。(pp.387-388)
- ・ 程度の副詞は体言の直上において之を装定してその意を限定することあり。(p.388)

[陳述副詞について]

- ・ 陳述の副詞は述語の陳述の方法を修飾するものにして、述語の方式に一定の制約あるものなり。この陳述の副詞は用言の實質上の意義即ちその示す属性には関係なく、この陳述の方法のみを装定するものなれば、用言が述語としての用法に立たぬ時には装定することなきものなり。(p.388)
- ・ これら(=陳述の装定をなすもの)は下にある用言のあらはす属性には関係なくしてその陳述の断言的なるか、躊躇的なるか、否定的なるか、或は条件的なるか等それら陳述の態度を予め拘束するものにして、これらに應ずる用言は必ず陳述をなすべくして、その陳述の方法にも一定の約束あり。(p.373)

山田は、陳述副詞をその述語にどのような表現形式を要求するかという観点から次のように下位分類した。

<述語に断言を要する副詞>

1. 肯定： かならず、もつとも、是非、まさに
2. 打消： いさ、え、さらさら、つやつや、つゆ／ゆめ (制止)
3. 強意： いやしくも、さすが
4. 決意： 是非、所詮
5. 比況： 恰も、さも

<述語に疑惑仮説を要する副詞>

1. 疑問： など、なぞ、いかゞ／あに、いかで (反語)
2. 推測： けだし、よも、をさをさ
3. 仮定条件： もし、たとひ、よし (pp.389-391)

6.2. 渡辺 (1971, 1974)

渡辺は構文的職能という観点から統辞論を展開し、語の認定と構文論的機能との関係から副詞の働きの研究に新しい視点を与えた。構文的職能とは、「言語表現の有機的統一性を形

成するために、言語の内的的意義に託される各種の役割の総称である。(1971, p.16)」と説明している。渡辺は、この構文的職能を大きく素材表示の職能と関係構成の職能とに分ける。これは大雑把にいうと詞と辞のそれぞれが担う職能に対応する。このうち、関係構成の職能と、それによって形成される成分は、「統叙、陳述、連体、連用、並列、接続、誘導」に分類される。

渡辺はこのうち「誘導の職能」の概念を適用していわゆる陳述副詞を捉えなおし、「誘導副詞」を定義した。典型的な誘導副詞の例としては次のようなものが挙げられている。

きっと失敗するだろう。

決して嘘はつきません。

たとえ苦しい時期があっても、くじけてはいけません。

もし会えなかったら、お手紙で連絡いたします。

(1971, p.303)

まず渡辺は、格成分や副詞的修飾成分を「連用成分」としてまとめ、これと陳述副詞との違いを次のように説明する。例えば「ゆっくり」「非常に」のような修飾語としての連用成分は被修飾語の実質上の意義(素材概念の性質)と関係のある装定しかできない。

「ゆっくり読む／ゆっくり立ち上がる／*ゆっくり美しい／*ゆっくり静かだ」

「非常に美しい／非常に静かだ／*非常に生きる／*非常に経営する」(1971, pp.305-306)

これに対して、「きっと」「決して」「たとえ」「もし」のような陳述副詞の修飾の対象は動作、性質、状態、事物その他に無制限である。

「きっと読む／きっと美しい／きっと静かだ／きっと桜だ」

「決して読まない／決して美しくない／決して静かでない／決して桜でない」

「たとえ読んでも…／たとえ美しくても…／たとえ静かでも…／たとえ桜でも…」

「もし読めば…／もし美しければ…／もし静かなら…／もし桜なら…」

(1971, pp.306-307)

また、「ゆっくり読む」において「ゆっくり」をつけることで「読む」についての詳しさを増すのに対して「きっと読む」ではそのような意味での情報内容量の増減に影響しない。

渡辺によれば、これら陳述副詞の文中での役割は「特定の表現を予定し予告する(1971, p.311)」ことである。たとえば、「決して」や「もし」は否定表現そのもの、仮定表現そのものではなく、否定表現や仮定表現を予告するものであるとし、表現の本体は後続する部分にありその後続の本体を予告し誘導する、それが誘導の職能で、まず従来の陳述副詞は誘導副詞と呼びかえたいと述べている。

さらに渡辺はこの誘導の職能はかなり広い範囲に認められると指摘する。たとえば、「もちろん原書を読みます／もちろんこの本は難かしい／もちろん京都は静かであった／もちろん我輩は大政治家である(1971, p.316)」のように「もちろん」は意義的には註釈内容を表示しつつ後続する註釈対象を誘導するという、誘導副詞の同類と考える。同様に「無論今年も山へ行く」「事実この帽子はスマートだ」「実際悪気のない男だ」「幸京都に住むことになった」「あいにく今持ちあわせがない(1971, 318)」のような語も同類と考える。

そして山田をはじめとして従来陳述副詞とされてきたものを、仮定や否定という話し手の態度を示すものとして「態度の」誘導副詞、一方で「もちろん」の類は一つの叙述内容に対する話し手の立場からの注釈を示すものとして「注釈の」誘導副詞と呼び替えている。(1974, p.137)

6.3. 中右 (1980)

文は意味的にみると、客観的なことがらを表す「命題」と命題や聞き手に対する話し手の心的態度を表す「モダリティ」という2つの要素から成ると一般に考えられている。日本語では、モダリティを表す要素は文末近くの述語部分に来るが、一部の副詞は文頭近くに用いられると、文末のモダリティを予測させることがある。いわゆる、呼応の副詞の呼応の現象である。

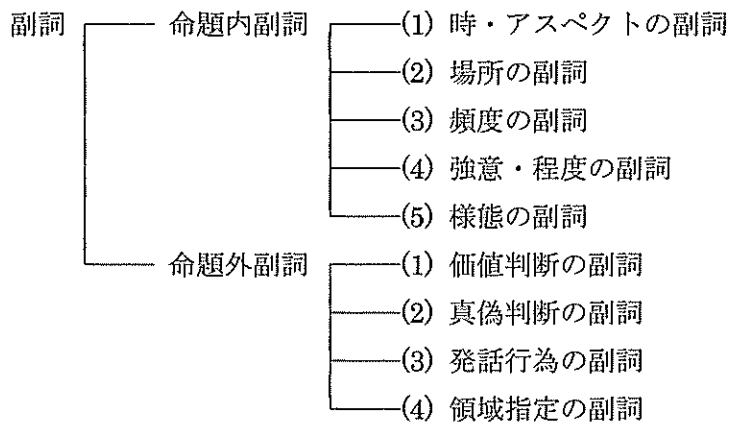
一方、ことがらの記述の一部を構成する副詞は、文中や文末近くに現れることが多い。このような副詞の機能の相違に着目し、中右は日英語の副詞の分類を試み、次のように述べている。

副詞は大別して、命題の内側にあるものと、命題の外側にあるものとに二分できる。命題の内側にある副詞(命題内副詞)は、命題の一部を形造るのであり、命題の外側にある副詞(命題外副詞)は命題に対するモダリティを表明する。

したがって、命題内副詞は、命題の一部を形成することはあっても、それ自体でモダリティを表明することはない。が、その反面、命題外副詞は、モダリティを表明することはあっても、命題の一部となることは決してない。つまり、命題内容の増減にかかわることは決してないのである。(p.161)

命題内容の増減にかかわるか否かで、副詞を命題内副詞および命題外副詞に二分した中右の副詞分類は、前述の渡辺が誘導副詞を「叙述の知的内容量に対しては、全く増減の影響を及ぼすことがない。」(渡辺 1971, p.310)と捉えるのと視点を同じくしている。

中右は、命題外副詞が命題とどのように関わり、またどんな機能を果たすのか、そして命題内副詞が命題内容の形成においていかに他の要素と関わるかに注目し、副詞の体系を以下のように示した。



それぞれの分類について以下のような副詞が例として挙げられている。

<命題内副詞>

(1) 時・アスペクトの副詞

あす、きょう、きのう、一昨日、すでに、もう、まだ、このところ、近年、近いうちに、しばらく、やがて、まもなく (p.165)

(2) 場所の副詞

ここに、あそこで、公園で、谷間に、上空に、屋根一面に (p.165)

(3) 頻度の副詞

いつも、つねに、しばしば、よく、時折、まれに、始終、ときどき (p.165)

(4) 強意・程度の副詞

全然、決して、すこし、ちょっと、まったく、ただ単に、完全に、絶対に、たいへん、たいそう、本当に、非常に、かなり、もっと、最も、はなはだ、なかなか、なんとなく、きわめて、ほとんど、あえて、あくまで(も)、到底、たとえ、仮に(も)、いかにも (pp.165-166)

(5) 様態の副詞

のろのろと、のらりくらし、めらめらと、ゆらゆらと、ゆっくりと、すばやく、ていねいに、用心深く、不用意に、単調に、熱心に、ぎっしり、にっこり、おもむろに (p.166)

<命題外副詞>

(1) 価値判断の副詞

運悪く、あいにく、幸いにも、不幸にして、うれしいことに、妙なことに、驚いたことに、不思議なもので、残念ながら、当然のことながら、お気の毒ですが、信じがたいことだが、悲しいかな (p.162)

(2) 真偽判断の副詞

おそらく、多分、もちろん、むろん、きっと、必ず、定めし、さぞ、確か、確かに、明らかに、思うに、考えるに、つらつらおもんみるに、疑いもなく、ひょっとして、もし

かすると、一見(したところ)、願わくは、わたしの見るところ(では)、わたしの知るかぎり (p.163)

(3) 発話行為の副詞

ついでながら、ちなみに、要するに、たとえば、率直に言って、本当のところ、つまりは、言わば、言ってみれば、言うなれば、どちらかと言えば、内輪の話だが、話は違いますが、おおっぴらには言えないが、ちょっとお伺いしますが、恐れ入りますが、ものは相談だが、改めて言うまでもなく (p.163)

(4) 領域指定の副詞

建前としては、表向きは、名目上は、もとを正せば、根本的には、基本的には、理想を言えば、理屈を言えば、原理上、定義上 (p.163)

(4)については命題内容の一部を形成すると考えられる場合があり、モダリティの成分と命題形成成分の両方を担うとみられる点に問題があることを中右自身が指摘している。

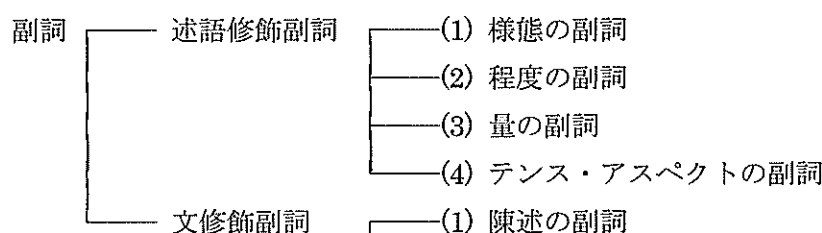
以上の様に、中右(1980)では語をはじめとして、句あるいは節レベルの語句にまで考察対象を広げて、それらに副詞としての性質を認めた。

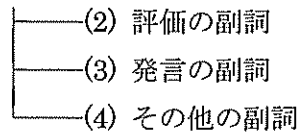
中右の研究で初めて、命題を軸として命題にかかわる副詞とモダリティにかかわる副詞という分類がなされ、現在は命題との関連の上で副詞のはたらきが論じられる傾向にある。副詞の作用域(スコープ)の観点から見ると、命題内副詞はモダリティを含まない命題内容を表す部分を作用域とし、命題外副詞はモダリティを含む文全体を作用域とするため、前者を述語(修飾)副詞、後者を文(修飾)副詞と呼んで区別する場合もある。

6.4. 益岡・田窪 (1992)

益岡・田窪は中右(1980)の立場を踏襲し、日本語の副詞をまず命題内容にかかわる副詞「述語修飾副詞」とモダリティを含む文全体にかかわる副詞としての「文修飾副詞」とに二分している。

そして、その下位分類として前者には「様態の副詞」「程度の副詞」「量の副詞」「テンス・アスペクトの副詞」の4つを、後者には「陳述の副詞」「評価の副詞」「発言の副詞」等を設定した。益岡・田窪の副詞の体系を中右の場合と同じようにまとめると次の様になる。





<述語修飾副詞>

- (1) 様態の副詞：動きのありさまを表す。「擬音語」や「擬態語」が多数含まれる。
 堂々と、黙々と、平然と、軽々と、一気に、いやいや、こわごわ、ぐっすり、ゆっくり、
 ぼんやり、にやにや、しくしく、じっと、さっさと、ドスンと、はっきり(と)、きっぱ
 り(と)、すくすく(と)、しとしと(と)、ザーザー(と) 等 (p.41)
 (動きの主体の意志の有無を表すもの) わざと、わざわざ、あえて 等/うっかり、思
 わず 等 (p.42)
- (2) 程度の副詞：程度のありかたを表す。
 大変、はなはだ、ごく、とても、非常に、極めて、おそろしく、ひどく、だいぶん、
 大幅に、ずいぶん、たいそう、相当、かなり、わりあい、わりと、わりに、けっこう、
 なかなか、少し、ちょっと、少々、多少、いづらか、じゅうぶん、よく、最も、いちば
 ん、もっと、ずっと、一層、はるかに、より、さらに、なお 等 (pp.42-43)
 (原則として述語の否定形と共に使われるもの) あまり、さほど、たいして、全然、全
 く、さっぱり、少しも、ちっとも 等 (p.43)
- (3) 量の副詞：動きに関係するものや人の量を表す。程度の副詞の中にも量の副詞としても
 使えるものがある。
 たくさん、いっぱい、たっぷり、どっさり 等 (p.43)
 (程度の副詞) だいぶん、ずいぶん、相当、かなり、少し、ちょっと、少々、多少、
 じゅうぶん、よく 等 (p.43)
 (述語の否定形と共に使われる程度の副詞) あまり、さほど、たいして、全然、全く、
 さっぱり、少しも、ちっとも 等 (pp.43-44)
 (全体のうちの大部分という意味を表すもの) だいたい、おおよそ、ほぼ、あらかた、
 ほとんど 等 (p.44)
- (4) テンス・アスペクトの副詞：事態が起こる時間や事態の発生・展開のありかたを表す。
 (テンスの副詞) かつて、いずれ、いまに、もうすぐ、これから、さきほど、のちほど
 等 (p.44)
 (アスペクトの副詞) いまにも、すでに、もう、とつくに、ちょうど、まだ、ずっと、
 依然(として)、もはや、次第に、だんだん、徐々に、ますます、とうとう、ついに、よ
 うやく、やっと、すぐ(に)、ただちに、たちまち、いつしか、やがて、まもなく、ほど
 なく、そのうち(に)、しばらく、いよいよ、あらかじめ、まえもって、かねて(から)、
 かねがね、突然、いきなり、ひとまず、いったん、とりあえず、さしあたり、はじめて、
 まず、ふたたび、また 等 (p.45)

(事態が起こる頻度を表すもの) いつも、きまって、常に、しじゅう、絶えず、たいてい、よく、しばしば、たびたび、しきりに、時に、時々、たまに 等 (述語の否定形と共に使われるもの) めったに、あまり、全然、全く、ちっとも、ほとんど 等 (p.45)

<文修飾副詞>

(1) 陳述の副詞：文末の「ムード」の表現と呼応する副詞であり、文頭に近い位置に現れ、文末のムードを予告する働きを持つ。

- ◆疑問と呼応するもの： いったい、はたして
- ◆否定と呼応するもの： 決して、必ずしも、とても、とうてい
- ◆依頼・命令・願望と呼応するもの： ぜひ、なんとか、どうか、どうぞ
- ◆概言・確言と呼応するもの： おそらく、たぶん、さぞ、まず、どうも、どうやら、きっと、必ず、絶対、確か、まさか、よもや
- ◆伝聞と呼応するもの： なんでも
- ◆比況と呼応するもの： まるで、あたかも、さも
- ◆感動と呼応するもの： なんと、なんて
- ◆従属節において条件・譲歩の表現と呼応するもの： もし、万一、かりに、たとえ、いくら、いかに 等 (pp.45-46)

(2) 評価の副詞：当該の事柄に対する評価を表す。

あいにく、さいわい、当然、もちろん、むろん、偶然、たまたま 等 (p.47)

(3) 発言の副詞：当該の発言をどのような態度で行うかを表す。

実は、実際(は)、言わば、例えば、要は、概して、総じて 等 (p.47)

(4) その他の副詞：上記の分類に収まらないもの

(限定を表すもの) 特に、異に、単に 等

(ある種の評価を表すもの) やはり、せっかく、せめて、さすが 等 (p.47)

ここにあげた、益岡・田窪(1992)の分類も、山田の「陳述副詞」の分類と同様に、テンスやアスペクト、陳述(モダリティ)などの被修飾成分の意味カテゴリーの検討を踏まえたうえでのものであり、単なる修飾成分の意味内容による分類ではない。

6.5. 仁田 (2009)

仁田(2009)では、文は言語活動の所産であり、「話し手が外在・内在的世界との関係で描き取った客体的な出来事や事柄を表した〈言表事態(命題/ディクトウム/コト/叙述内容)〉と、言表事態をめぐっての話し手の主体的な捉え方および話し手の発話・伝達の態度のあり方を表した〈言表態度(モダリティ/モドゥス/ムード/陳述)〉」(p.10)とから成り、日本語の文は次のような基本的な意味一統語構造を持つとした。

〈言表事態〉 〈言表態度〉 はそれぞれ中右の「命題」「モダリティ」に相当するものである。そして、中右による副詞の二分類である「命題内副詞」「命題外副詞」には、「言表事態修飾語」「言表態度修飾語」という用語をあてている。

「言表事態修飾語」とは「言表事態の成り立ち方を様々な観点から修飾・限定したもの」であり、「言表態度修飾語」とは「事態の内容の増減に関与せず、事態に対する話し手の評価的な態度や捉え方や伝え方を表したもの」であり、「言表態度の層で働き、文や節のモダリティ的側面とかかわり合う」(いずれも p.20)とした。

仁田(2009)もやはり文の修飾成分を事態の内容を表すものと、事態の内容の増減に関与せず事態に対する話し手の態度にかかわるものと大きく二分しており、中右の立場を踏襲したものとと言える。

仁田が挙げた例をそれぞれ次に示す。

<言表事態修飾語>

- (1) 結果の修飾語：動きが実現した結果の主体や対象のあり様に言及する。
・ 塀がこなごなに崩れている。 / ・ 上着をどろどろに汚してしまった。
- (2) 様態の修飾語：動きそのものの実現のされ方を表す。
・ 塀ががらがら崩れている。
- (3) 主体めあての修飾語：主体の状態のあり様に言及する。
・ 彼はわざと出ていかない。
- (4) 程度性の修飾語：状態や関係の程度性を取り出す。
・ 雪がすごく積もった。 / ・ A と B とは全く等価だ。
- (5) 数量の修飾語：主体や対象の数量規定を行う。
・ 虫が無数にいる。 / ・ 洗濯物をたくさん洗った。
- (6) 時間関係の修飾語：動きの時間的あり方を限定する。
・ 彼を一晩中看病した。
- (7) 頻度の修飾語：事態生起の回数的あり方を表す。
・ しばしば彼女に会った。(p.20)

<言表態度修飾語>

- (1) 評価的な態度を表す
・ あいにく / 残念ながら明日は休みだ。
- (2) 程度性を伴った押し量りといった言表事態に対する捉え方を表す

- ・ おそらく明日は晴れるだろう。
- (3) 聞き手への促しといった話し手の伝達的態度のあり方を表す
 - ・ どうぞこちらへ来てください。
- (4) 事態の構成要素の把握のし方を表す
 - ・ たった千人しか集まらなかった。(pp.20-21)

以上見てきたように、副詞は命題内容にかかわる副詞である命題内副詞／述語修飾副詞／言表事態修飾語とモダリティにかかわる副詞である命題外副詞／文修飾副詞／言表態度修飾語の2つに大別される。

<命題内副詞／述語修飾副詞／言表事態修飾語>

1. 客観的なことがら(命題)の一部を成す。
2. 命題の内側にある要素である。
3. 叙述の内容増減に関与する。

<命題外副詞／文修飾副詞／言表態度修飾語>

1. 話し手の主観を表す。
2. 命題の外側にある要素、すなわちモダリティの要素である。
3. 叙述の内容増減に関与しない。

参考文献

- ・ 工藤浩 1980 「副詞」の項目、『国語学大辞典』 pp.744-746, 国語学会編, 東京堂出版
- ・ 工藤浩 2000 「3 副詞と文の陳述的なタイプ」, 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 『日本語の文法3 モダリティ』, pp.161-234, 岩波書店
- ・ 中右実 1980 「文副詞の比較」, 国広哲弥(編)『日英語比較講座 第2巻文法』, pp.157-219, 大修館書店
- ・ 仁田義雄 2009 「第1章 現代語の文法・文法論」, 工藤浩他著 『改訂版 日本語要説』, pp.1-30, ひつじ書房
- ・ 島郁 1991 「第一部 副詞論の系譜」, 『副詞の意味と用法』日本語教育指導教科書 19, pp.1-46, 国立国語研究所
- ・ 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法—改訂版—』, くろしお出版
- ・ 矢澤真人 2000 「4 副詞的修飾の諸相」, 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人 『日本語の文法1 文の骨格』, pp.187-233, 岩波書店
- ・ 山田孝雄 1936 『日本文法学概論』, 宝文館
- ・ 渡辺実 1971 『国語構文論』, 塙書房
- ・ 渡辺実 1974 『国語文法論』, 笠間書院